

## 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

The Labour Year Book of Japan special ed.

## 第五編 言論統制と文化運動

## 第三章 教育運動

## 第一節 戦前における教育労働者運動

## 教育労働者運動の概況

日本教育労働者組合(教労)は一九三〇年十一月東京、神奈川の現職教員二〇数名を組合員として非合法のうちに結成されたが、翌年五月日本一般使用人組合(官公庁、デパート、市場等の下級使用人の組合)、日本映画従業員組合、日本医務労働者組合と合同し、日本労働組合全国協議会(全協)の一般使用人組合教育労働部として再組織された。

そのころには組合員は十数倍になり、全国各地に支部が設けられその組織拡大に、新教の機関誌「新興教育」は大きな役割をはたした。しかし、一九三三年二月四日から数次にわたる長野県の教員一三八名にのぼる検挙、同年七月から八月にかけての全国的な三三二名検挙など、相次ぐ弾圧によって教労運動もついに壊滅した。この間、新興教育研究所は、その機関誌「新興教育」で教労運動の方向を明らかにし、活動の指針となるような論文を掲載したり、国際的な運動の経験、各地の経験の交流、新興教育の理論的問題の啓蒙、反動的教育政策の暴露などを展開する一方、現場の教師の先進的な教育実践「教育内容の自由化」、「教育の実際生活化」、「教育と社会の結合」の記録を集録、交流し多くのすぐれた教材研究や、全協教労長野支部編「各科教授方針批判」、同支部編「修身科無産者教授教程」、新教同盟準備会編「小学校における各科教授方針」などを生みだすなかだちとなり、さらに、教授方法・教材の取り扱いだけでなく、教育方法においても、分団教授法、グループ研究法のすぐれた要素を発展させ、あるいは作業主義教育、労働教育、郷土教育、生産教育などのもつ進歩的な内容をとり出すことにも努力していた。

教労運動の壊滅のあと、教育の面でのファシズムに対する最後の抵抗となったのは、生活綴方運動に代表される良心的な教師の教育実践であった。「全国各地ではファシズムの嵐の中で、地道な教育実践が続けられ、文集の交換や研究雑誌の交流、討論によって、教師たちは手を結びあおうと努力した。教員組合運動はもちろん労働運動全体が沈黙し、屈服させられていたとき、その良心的な意図と必死の努力にもかかわらず、その運動はファシズムに対する抵抗の力を失いがちであった。そして一九四〇年二月に始まる『北方教育』、『生活学校』同人の検挙、一九四三(昭和一八)年から翌年にかけての教育科学研究会のメンバーの検挙によって、日本の教育の中に残されていた先進的な教員の運動は圧殺されてしまい、良心の灯は一人一人の教師の心の中でともされなければならなかったのである」。(注1) たとえば「生活学校」誌上では次のような問題提起がおこなわれた。「現行カリキュラムに対する良心的な教師たちの不満が、綴方を全教育を統括する王座にまで祭りあげてしまった。その気持はよくわかる。僕もやはりその経験をもつ。……子どものことを思えば、そうしてくれる教師に頭が下がる。しかしそれに没頭して、良心的な教師がそれによって良心を満足させ、もっと本質的な解決方決のため力を尽すことを忘れてしまったら、それは反動的な意味をもつようにさえなるだろう。では本質的なことは何か。それは政治的な解決への努力だ」(戸塚廉「旅

の感想」、「生活学校」誌一九三七年一・二号新収)と。

(注1) 日本教職員組合編「日教組一〇年史」、一九ページ。なお、教育運動全体の記述については、とくに次の著作に負うところが多い。「岩波講座、現代教育学5、日本近代教育史」(岩波書店、一九六二年二月刊)。菅忠道、海老原治善編「日本教育運動史、3、戦時下の教育運動」(三一書房、一九六〇年一・二月刊)。

## 教育者グループの活動組織と活動家の検挙

教労運動壊滅以後における教育者グループの活動組織と活動家の検挙状況については、次のごとく述べられている(司法省刑事局「生活主義教育運動について、思想研究資料特輯第九七号」、一九四三年八月による)。

### 北日本国語教育聯盟

(一) 結成経過 東北地方は縷々冷害凶作に襲われ、農村の窮乏甚しく、従って文化の程度低く、児童の生活環境も悪かった為児童の生活指導という問題が教師の前に現実的な必要を以て迫っていた。斯様な事情から東北地方に於ては、早くから各県に、左翼的傾向を持った綴方教師によって綴方を中心とする生活教育研究のグループが結成せられ、「北方教育」(秋田)、「実践綴方地帯」(宮城)、「綴方文化」(福島)、「綴方環状線」(岩手)等の機関紙を発行し、又教室に於ける実践の結果たる児童文集を交換して、相互に研究並に実践の刺激を図って来た。斯くの如き状態に在った時、昭和九年の大凶作が起り、之に刺激せられて、右の生活教育研究グループの指導的地位にあった鈴木銀一、国分一太郎等の左翼分子が主となり、東北社会のマルクス主義的分析の基礎の上に、教育理論を形成して「北方性教育」と称し、之を指導理論として同年二月宮城、福島、秋田、山形四県の綴方教師を糾合し「北日本国語教育連盟」を結成して、其の理論の啓蒙普及に乗り出した。翌昭和一〇年六月には青森、岩手二県の綴方教師も之に加入し、茲に於て東北地方に於ける生活教育研究の小グループは全部此の連盟に統一せられたのである。当時の連盟の委員は、

鈴木銀一(宮城)、佐々木正(宮城)、木下竜二(福島)、佐々木太一郎(秋田)、加藤周四郎(秋田)、国分一太郎(山形)、土崎兼房(青森)、三上齊太郎(青森)、高橋啓吾(岩手)、永沢一明(岩手)、

### (二) 活動

(1) 機関紙「教育北日本」の発行、(2) 講習会、協議会等の開催、(3) 「教育・国語教育」、「綴方生活」、「工程」等の中央諸雑誌に投稿宣伝、

### (三) 検挙状況

(1) 検挙年月、昭和一五年二、一一、一二月。昭和一六年九、一〇、一一、一二月。(2) 検挙人員三一名、(3) 起訴人員九名。

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

発行 1965年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)